
たんぽぽ王子様

青井ハナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

たんぽぽ王子様

【Nコード】

N5784F

【作者名】

青井ハナ

【あらすじ】

心優しい民と多くの自然に囲まれたとある国の後継者、リップ王子。しかし彼はとんだ遊び人で、あっちでフラフラこっちでフラフラ、ろくに勉強もしない放蕩王子なのです。見かねた王様とお后様はかわいい我が子に試練を与えようと、何と、王子をたんぽぽにしてみました！果たして王子様は無事成長し、元の姿に戻ることが出来るのでしょうか？

プロローグ

草木も眠る静かな闇夜。

今宵はなぜかいつも顔を出すお月さまの姿も見えません。

大きな森の奥深くに、とある国のとある王様の大きなお城がありました。

「王子、リップ王子！起きてくださいまし！このばあやも、これ以上あなたを庇うことは出来ませぬ。先ほど、あなたのお父様とお母様を中心に、検討会が開かれました。じきに判決が下されることでしょう。そうなれば王子、あなた様はこの国を追放されてしまうに違いありません！さあ、早く目を覚まして今のうちに弁明なさって下さいまし、心を入れかえて精進すると！」

そのお城の最上階の一室で、ばあやは深い眠りに落ちている王子を強く揺さぶりながら、必死に王子に事態を説明していました。しかし、王子はいつこうに目を覚ます気配はありません。

「王子、早くしないと判決が下ってしまいます。早く、早く……ああつ、間に合わなかった！奥様と旦那様がこちらにむかっているつしやいます。もう間に合いません、ああ、何と言うこと！！王子、リップ王子、ばあやに出来ることはもはや何もありません……。どうか、どうかお元気で……」

純白の布団にくるまれながら、だらしなく胸元をはだけ、ばあやの必死の揺さぶりにもむにやむにやと反応なく眠り続けているこの王

子。

顔立ちだけは恐ろしいほどに整い、陶器のように白く滑らかな肌と金色に輝く髪は、まるで天使かと見間違っかのよう。

そんな王子を見下ろし、ため息をつく王様とお后様。

かわいい我が子ではありますが、このままでは到底この国を任せることは出来ません。

何故なら、このリッピ王子。

その甘いマスクと王子のステイタスをいように利用して、あちこちのお姫様やお后様にちょっかいを出しては問題を起こしているのです。

博愛学も動植物学も全く勉強せずに遊び回っている王子には、心優しい民と多くの自然を持つこの国を治めることは出来ません。少なくとも今のままでは・・・。

王様とお后様は顔を見合わせると、決心を確かめ合うように小さくうなづきました。

ほー
ほー

森からふくろうつの声が聞こえています。

天使も魔物も現れることをためらうほどに、静かな静かな城の夜更けです。

ほー ほー

星さえも眠りにつくような深く澄みきった夜のとばりの中で、その声は不気味に、途切れることなく城の窓から忍び込んできます。

王子の部屋の外には、手をにぎりしめて両の目をかたくつむり、祈り続けるばあやがいました。

「ああ、リッピ王子！どうか、どうか、神のご加護を・・・」

その時。

王子の部屋が目もくらむほどの神々しい光に包まれ、おびただしい量の光と熱がその扉から溢れ出してきました。

そのまばゆさに、思わずばあやは扉に背を向けてかがみこむと、しわしわの小さな手で顔をおおいました。

そして小さくうめきました。

「ああ、まさか、そんなことが！」

部屋の中から王様の太く威厳のある声が聞こえてきました。

それはこの国に何千年も語り継がれてきた恐ろしい身代わりの呪文・・・。

「fパウイmcダjケウイmddさびるwnきgwsばskf；
slide、ダンデ・・・ライオーンツ！！！！！」

第1話：たんばばになった王子様

とある国のとある原っぱ。

冬の間寒さに耐えるように押し黙っていた草木や花々は、やっと温かくなったことが嬉しくて、それはもうおしゃべりに夢中なご様子。うわさ話や恋のお話に花を咲かせて、あっちでクスクス、こっちでクスクス。

原っぱは春満開です。

その原っぱの片隅に、黄色のまあるい頭をもたげた、陽気でお調子者の花たちの集落がありました。

その中に、一際金色に輝く上品な花が一輪ありました。

「全く。のんきなもんだぜ。おれ達の気も知らないでさ!」

そうつつくさ文句を垂れているのは、せっかち者の青年ドム。

「ああ、ステキ!私もあんな恋がしてみたいワ。」

そうつつとりと見惚れているのは、夢見る乙女のナナ。

視線の先には、毎日この原っぱに現われる、一組の物静かな男女がいました。

ドムとナナはその二人を見ては飽きもせず、同じセリフを繰り返しています。

「おい、お前どう思う、あの二人。くつつくか?それともだめか?」

なかなか進展しない二人がじれったいドムは、その一際金色に輝く上品な花に聞きました。

するとその花はこう答えました。

「私ならばさつさとあの女性を抱き寄せてものにしている。それで私になびかなかった姫はいない。」

そして、フンとあごをしゃくってみせました。

ドムは、あきれた、と言わんばかりの表情で、

「おいおい、お前はいつもそれだな。そうじゃなくてさ。あの二人ならどうするかって話をしているのさ！」

とおおげさに首を振ってみせました。

どこからか飛んできたとう虫をアクセサリーにしたナナが、おかしそうにクスクスと笑いながら割って入ります。

「彼にそんなこと聞いたってだめよ、ドム。だって、彼は魔法をかけられた王子様なんだから！ あんなじれったい恋なんてしたことがないのヨ、きつと。」

そうなのです。

この一際金色に輝く上品な花。

なんと、王様の魔法でたんぽぽにされてしまったリップ王子だったのです！

昨日まで、甘いマスクと王子のステイタスをいのように使って楽しく遊びまわっていた王子のことです。

魔法をかけられた自分の姿に、大変なショックを受けたことは言うまでもありません。

甘いマスクはもうありません。あるのは黄色くてまあるい頭だけ。遊びまわることはもう出来ません。だって、今の彼は動くことすらままならないのですから。

身の回りの世話をしてくれる優しいばあやもここにはいません。

王子はがつくりと首を深くうなだれると、溜め息をついて下ばかり見えています。

王子の耳には、他の花たちがにぎやかに咲かせるうわさ話も恋の話も入ってきません。

あるのは、早く元の姿に戻もどりたいという強い願望だけ。

話しかけてくれるドムやナナに対しても、冷たくえらそうな態度をとるばかり。

「ああ、いったいどうしたら元に姿にもどって、また楽しく遊びまわることができるのだろうか・・・。」

せつかくの春だというのに、ただ一人、王子だけが暗くて悲しい顔をして毎日をやり過ごしていました。

第2話：春のそよ風たち

ぽかぽか陽気の原っぱは、今日もにぎやかに春満開。
あっちでもこっちでも、クスクス、クスクス。

原っぱには、一人のハープ弾きの男と、歌うたいの娘が今日も仲良く来ています。

二人は友達のようにもあり、恋人のようでもありました。
ドムとナナのおしゃべりも相変わらず絶好調です。

「ああ、今日もあの二人は歌って弾いてそれで終わり？早く進展すればいいのに！」

とせっかちなドムはじれったくてたまらない、と黄色のまあるい頭を振っています。

「まあまあ。二人はゆっくりと、自分たちのペースで愛をはぐくんでいるのよ。私たちものんびり見守りましょうヨ。」

恋に恋するナナは、うっとり胸に手をあてて言います。

そんな二人の会話に参加もせずに、王子は今日も下を向いて溜め息をついています。

「ばかばかしい。人のことなんてどうだっていいじゃないか。今の私は自分のことで手いっぱいだ。ああ、どうしたら元の姿に戻れるのだろうか……。」

すると、がっくりと下を向いている王子の耳にかすかな歌声が聞こえてきました。

それは今までに聞いたどんな歌声よりも美しく、王子の耳を心地よくくすぐりました。

王子は顔を上げました。

どうやら声の主は、例の歌うたいの娘のようでした。

— ふふ、ふふふ。聞こえる？この声が、この歌が。 —

春のイタズラ好きな風たちが、王子のもとまで娘の歌声を届けにやってきたのです。

風たちは、ふふふ、ふふふと王子のまわりをふわふわと漂います。ドムとナナがはいで声をかけます。

「やあ、そよ風さん！素敵な歌声をとどけてくれてありがとう！どうもありがとう！」

王子はとてもびっくりしました。

風の声が聞こえたことに。そして、ドムとナナが風に話しかけたことに。

だって王子は、今まで人間以外のものと話をしたことなんてなかったのですから。

王子は二人におずおずと聞いてみました。

「二人は風と話をすることができるのか？」

すると二人は声をそろえて陽気に言いました。

「あたりまえじゃない！そよ風さんだって、てんとう虫さんだって、みんなとお話できるよ！」

その答えに王子は目を白黒させておどろきました。

風が話をするなんて、てんとう虫が話をするなんて！そんな話はただの一度だって聞いたことがありませんでした。

「さあ、きみも話しかけてごらんよ。簡単なことさ。」
ドムが王子をうながします。

王子はとまどいながら、そよ風に向かって話しかけてみました。
「そ、そよ風さん。すてきな、歌声を・・・ありがとう。」

すると王子の周りの風がそよそよと優しくざわめいたかと思うと、
こっお返事が返ってきました。

「いいえ。お礼を言われるほどではありません。あなたが毎日暗い
顔をしていたから、私たちからのちょっとしたプレゼントです。ふ
ふふ。」

そうして春のそよ風たちはざあつと原っぱの草たちをゆらして遠く
に去って行きました。

王子はいつまでも去っていくそよ風たちを見ていました。

自分はここでたんぽぽになってから一体何をしていたのだろう。何
てもったいないことをしていたのだろう。

周りこんなにもすてきな話相手であふれていたのに。
顔をあげれば、元気なドムとナナの顔がありました。

たくさんたんぽぽたちがいました。たくさんてんとう虫やちよ
うちょうたちが飛んでいました。

そして頭の上には優しく光をふりそそぐ太陽がいました。

王子の周りは、もうずっと前からたくさん陽気で美しい仲間たち
であふれていたのです。

王子はようやくそのことに気がつくことができたのです。

第3話：春のおわり

春の原っぱはあたたかなにおいとおしゃべり好きな花たちでとてもにぎやか。

クスクス、クスクス、でもあれれ？

元気なみどりの葉っぱたちが少しいきおいづいてきたようです。

クスクス、ザワザワ、クスクス、ザワザワ・・・。

今ではすっかりみんなと打ちとけてきた王子は、今日もみんなの話を耳をかたむけています。

たんぽぽ仲間の陽気なおしゃべり、そよ風からの素敵なおくりもの、太陽から降りそぐオレンジ色のあたたかな光。

ドムとナナも相変わらず、原っぱに来る二人の男女のうわさ話に夢中です。

そんな毎日の中で、王子は少しづつ元気を取りもとし始めていました。

それでも、どうしたら元の姿にもどれるのかはやっぱりわかりません。

ドムやナナも一緒になって考えてくれましたが、やっぱり全然わかりません。

王子は毎日みんなの話を耳をかたむけながらも、一体自分はいつまでこの姿でいなければならないのかと、心の中はいつも不安でいっぱいです。

そんなある日のこと。

一人のたんぽぽ仲間の頭を見た王子はとてもびっくりしました。そしてあわててドムとナナに聞きました。

「おいっ、彼を見てくれ！頭が白くてふわふわになっているぞ！」しかし二人は全くおどろきませんでした。

「ああ、もうそんな時期か。そろそろこの陽気な黄色の頭ともお別れだ。白いわたげになって飛んで行かなくちゃ。」

とドムがやれやれと首をふる、ナナも、

「そうね、そろそろなのね。さびしいワ。」

といっになくしんみりとした顔をして、少しの間しずかにだまっていました。

王子はあせりました。

もしかすると自分もこのまま王子にもどることなく、白いわたげになって空に飛び立ち一生を終えてしまうのではないか。

そう考えると、王子は不安で不安でしかたがありません。

何日かたつと、ドムとナナの頭もすっかり白くてふわふわの頭になりました。

もはや黄色いあたまなのは王子ただ一人です。

ドムが言いました。

「さあ、おれたちはそろそろ旅立たないといけない。」

ナナもうなずきました。

「リップ、あなたはまだ旅立ってはいけないみたいネ。何かやるべきことがあるのかしら？」

いつもより少しつよい風がざあつとふくと、つぎつぎと白いわたばうしたちは空に向かって飛びはじめました。

「リップ、一緒にいられて楽しかった！今度会うときは王子のすがたのきみと会いたいよ。頑張ってくれ！」

「じゃあね、リップ。私たちはちよつと風にのつてあの二人の恋の様子でもさぐつてくるワ。また会うときはあの二人がどうなったか教えてちょうだいネ！」

そう言うと、ドムとナナは軽やかに風にのり、空へと旅立っていきましました。

王子はなすすべもなく、空たかく飛んでいくみんなを見ていました。そのすがたが、バイオリン弾きの男と歌うたいの娘を通りこして、もっともつと遠く、王子の知らないはるか遠くに消えていくまで。ずっとずっと。

そして王子はたった一人、この広い原っぱに取り残されてしまいました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5784f/>

たんぽぽ王子様

2010年10月28日04時36分発行